

あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく願いいたします。

皆さんはどんなお正月をお過ごしでしょうか？私は久々に年末から日本へ一時帰国をしています。日本で新年を迎える時、必ず思い出すことがあります。以前住んでいた街に小さな氏神さんがありました。神社の由来などは忘れてしまいましたが「村の氏神様」らしい神社でした。普段は子どもたちのかくれんぼや鬼ごっこの場になっていました。そんな小さい名も通っていない神社もお正月には神主さんや街の人たちに綺麗に掃き清められ、12時を回ると地元の人たちが続々とお参りやってきました。深夜の冷たい空気、そして参拝客に振舞われる冷たいお神酒の美味しさは忘れられません。と、少々不順な初詣の動機でしたが日本での楽しい思い出の一つです。今は実家も奈良県に移り、歩いて行ける所に神社もなくなり、年末の帰国時の楽しみが一つ減りました。しかしご存知のように奈良は社寺の宝庫でもあります。奈良市内の有名な春日大社を初め高名な神社がたくさんあります。中には橿原神宮のように日本の神話的な記録に登場する神武天皇を祭る神社もあります。何しろ神話と古代史と歴史と現代が混ぜ合わされたようなところ。普通は想像もできない史跡や遺跡が身近にある所なのです。神社や史跡遺跡だけでなく仏閣にも「奈良の大仏さん」で有名な東大寺があります。この「大仏さん」は文字通り高さが焼く15メートルもある大きな坐像です752年に開眼供養が行われました。その後何度か戦火（近代史の戦争ではありません）にあい、時には1部を残して溶けてしまったことがあるそうです。東大寺以外にも日本最古の木造建築物である法隆寺も名刹として高名です。そしてはるばる唐から布教のために日本に訪れた鑑真大和上のために作られた唐招提寺。2010年には1300歳となる興福寺など気の遠くなるような歴史を誇るお寺もたくさんあります。奈良のお寺の中には「南都仏教」と呼ばれる、檀家を持たずお葬式もせず、お参りする方のお布施を頼りに運営しているところもあります。その一つの薬師寺は710年に現在の位置に建て移された古刹でした。しかし度重なる戦火（これも近代史の戦争ではありません）で金堂が焼け落ち、仮金堂として建てられたのが16世紀。それから400年以上も仮の姿のままでした。この「400年」と言う年月の長さに奈良の奥深さを感じるのは私だけではないと思います。そんな建築物も昭和初期には建物の多くの部分が傷み、毎日のお勤めも雨が降ると傘が欲しくなるほどの雨漏りがあったそうです。歴代の住職（管長）の悲願はこの金堂の再建でした。そして1967年に就任した高田好胤管長は写経を一般の人たちにお願ひし、1巻1000円の納経料を納めてもらうことでその費用の10億円を集めようとした。日本中あらゆるところで講演会を開き、そして写経を進める姿は「タレント坊主」と一部のマスコミから非難を受けましたが、その決意を曲げることなく1976年、その大屋根の見事な曲線を「鳳凰が飛ぶ」と比喻された、高さ22メートル、幅27メートルの金堂再建を果たしたのでした。高田管長はその後も写経勧進を進め、薬師寺を1300年前の姿に戻そうとされました。

お寺の話を書き綴ってしまいましたが実は私自身、生まれてから今までお寺には縁のあるほうでした。生まれてすぐに育てられたのは京都府と大阪府の境にある天王山で有名な大山崎の観音寺。今でも住職とは遠い親戚関係にあります。そこは3ヶ月ほどしか住んでいなかったのですが、保育園は吹田市のお寺で2年お世話になりました。祖母に連れられ日蓮宗のお寺に修行に分けも分からず引っ付いて行った幼児期が過ぎると、10年ほど続けたボーイスカウト活動が大阪市内のお寺でした。そしていところが大阪市内にお寺を開くなど、仏教に身近な環境で生活していました。今でも和尚さんのお話の1部を覚えています。そしてその言葉はこの年になり、今まで以上に大切なものとなってきています。

「にらめっこしょうか」と観音寺の和尚さんに言われ、にらめっこを始めるとその目の光が怖くなり、とうとう目をそらしてしまったことがありました。そのときの和尚さんの言葉。「わしの目の光が怖くなったというのはお前の目が怖かったからや。わしの目はお前の目を写してただけやから」と自分の姿に応じて相手の心も変わってくることを諭されました。「天国と地獄の食事は同じものが用意されている。しかし天国の人たち

は豊かな体つきになり、地獄の人はガリガリに痩せている。同じ食事を同じ時間で同じ形式の食堂で食べているというのに。何故なら食事は豪華だが、食べるときにはいすに座り、床に直接置かれた器から長い箸を使って食べなければならない。地獄の人はその長い箸で自分の食事をつまみ、口に入れることができず食事の時間を終えてしまう。天国の人はその長い箸で向かいに座っている人に交互に食べさせてあげる。そして美味しい食事を楽しんでいるからだ」と他人を信じ思いやる心も教えてくれました。そして前述した高田好胤管長の著書にも素晴らしい言葉が載っています。「人の話を聞くときはその話し手の心を聞け、文章を読むときはその行間を読め」「見るは色の世界を見ること、観るは空の世界を観ること」「知識は体を飾り、知恵は心を飾る。心の伴わない知識はいくら多くても何の価値もない。かえって知識が多というそのことにとらわれ、物事の本当の姿を見失うことになりがちである」など、金言名句がたくさんあります。

私は決して人に仏教徒といえる人物ではありません。逆に教えに背いていることの方が多い普通の市民だと思えます。しかし最近になり物の文明が心の文化を破壊しているような日本を見て、これからこそ心の教えが必要だと感じてきました。5歳児の50%がDSなどのゲームを楽しんでいる現代です。その疑似体験がその人間の知識となり、実際に起こる物事に対して人間らしい判断ができなくなってきているようです。「10時に会をはじめます」と言うと10時になってやってくる人がいます。「なぜ悪いの？10時に来たでしょ」と発言する人がいます。「一人ぐらい遅れても」と平気で遅れてくる人もいます。電車の中でむずかっている自分の子どもに「そんなことしているとあのおじさんに叱られるよ」と言う母親もいます。大きなトラブルを起こしながらも、「こんなに大きな問題になるとは思わなかった」とその行動の浅はかさを口にする人がいます。言葉が足りないために誤解を招き「そんなつもりじゃなかった」と弁解する人がいます。「何でも自分で責任を取るから自分の好きなように振舞います」と他人を省みない人もいます。そんなんでええんやろうか？

幼稚園で必ずするお話があります。それは「人」という漢字を使ってのお話です。「人」という字は「人は一人で立つことができず、支え合って立っているんだ」というお話です。他人を思いやり、そして今自分がいることが他人のお陰だと思い、感謝する気持ちを大切に育てて行きたいと思えます。もちろん、自分へも同じ言葉と投げかけながら。

《つづく》

参考 高田好胤著 情（なさけ）